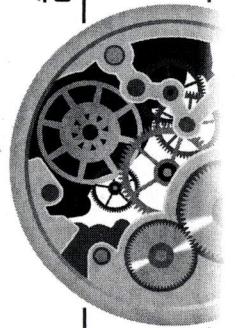


越境精神

小長谷 有紀



梅棹忠夫の残したもの 12

山と探検文学賞

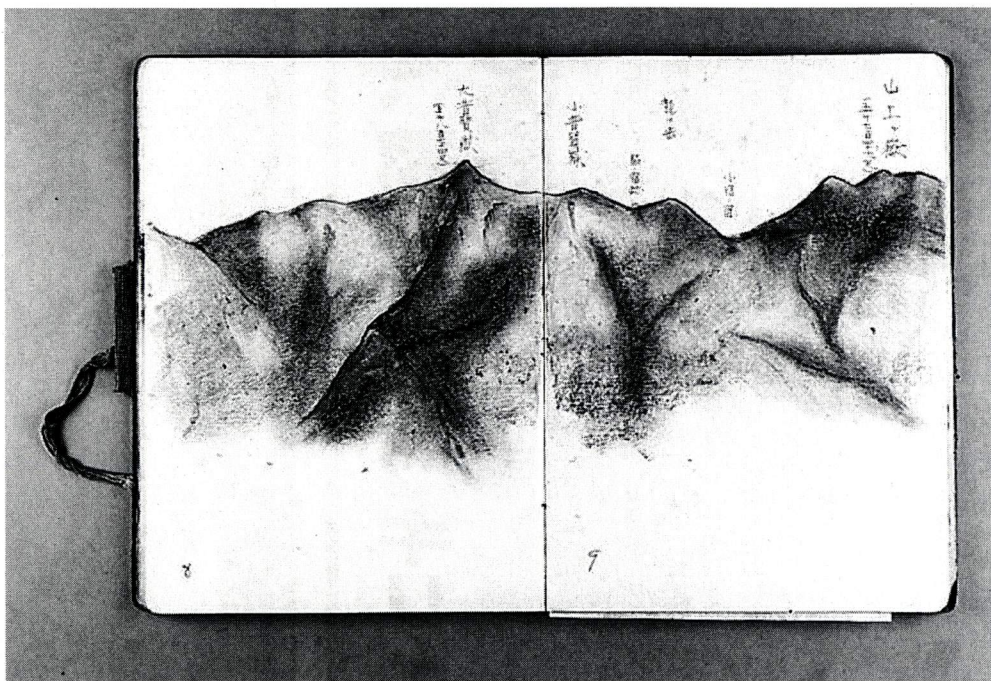
去る7月21日、国立民族学博物館で、初代館長の名を冠した「梅棹忠夫・山と探検文学賞」の第1回受賞作品が発表された。角幡唯介さんの『空白の五マイル―チベットの、世界最大のツアンポー峡谷に挑む』（集英社）である。

この作品は、すでに昨年、第8回開高健ノンフィクション賞を受賞しており、さらに今年4月に第42回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞していたので、これでトリプル受賞となる。聞くところによれば、東日本大震災のために発表が遅れた結果、大宅賞に先行されてしまったらしい。だから、第1回の贈賞がはからずも3度目の受賞になったのだった。

開高賞ならアウトドアに関する作品がふさわしいとしても、大宅賞の対象はノンフィクション全般であり、一方、梅棹賞は「山と探検」に限られる。三者のこうした重なりを考えると、ノンフィクションの中で当該作品がよほど秀でていたに違いない。

地理上の空白などもはやあるまじいという大方の常識を超えて、チベットにある世界最大の渓谷に

リスクを回避する探検



スケッチブック9冊にわたってパノラマで描かれた紀伊の山並み。梅棹は15歳の夏、級友たちと台高山脈と大峰山脈を縦走した

ある未踏査地を2002〜03年と2009年の2度にわたって単独で歩いた記録である。人類未

踏とされるのは5マ、約8キロ。死の危険を顧みず、冒険し、生還した。

本人のブログには「書くことを前提に冒険行為をした場合、原稿

に書くことを常に意識して行動するため、行為がどうしてもそこにひきずられてしまう。わたしの場合は書くことを前提に探検や冒険をするので、よって行為としては純粹ではない」とある。

彼にとつて、探検と冒険は同義であり、どちらも純粹だが、書く目的があると不純になるといつわけた。さしずめ、結婚を前提としたおつきあいは純愛にならないというところか。

梅棹なら、行きたい、見たい、知りたいという衝動と同じくらい、書きたい、伝えたいという衝動があることを、きわめて純粹に愛でたのではないかと想像される。

ただし、むしろ、冒険と探検の違いにはこだわった。リスクを犯すことにしげれるのではなく、リスクを事前に回避する知的営みを重視した。単独行であれば冒険が許されよう。リスクは本人が背負えばいいだけのことだ。しかし、他人にリスクを強いてはならない。それが2人以上での登山や探検の鉄則となる。

リスクといえば、わたしたちは今、山にのぼらずとも、十分に大きなリスクとともに生きることを強いられている。次回の梅棹賞の候補作には、意外な領域を探検してみせる作品が出てくるかもしれない。

(国立民族学博物館教授)